

## 学 位 論 文 要 旨

氏 名 青木 善治

題 目 子どもが「生きる力」を育む造形活動に基づく教育実践研究

## 1 研究の目的と方法

社会の急速な変化に伴い多様化する子どもたちの育ちは、教育内容と教育技術の視点から構成された従来の教育実践の場において、「子どもの見えにくさ」として教師たちが直面する問題状況となっている。一方で、学校等における教師の年齢構成の変化等に伴い、教育実践の実際を通じた教師の学び合う関係が解体し、目の前の日々の実践への省察が成り立ちにくい状況にある。

そこで本研究は、まず、図画工作科の時間に子どもたちが、今ここで、他者とともにものや場へと関わり、「思い」やイメージと表現行為とを相互につくり、つくりかえる過程で、自らの見方、感じ方、考え方、表し方、ふるまい方をつくり変えて新たに成り立たせていく「生きる力」を育む造形活動の関係と過程を、相互行為分析やエスノメソドロジーの記述分析の方法を援用して詳細に捉え明らかにした。

次に、教師の研修会において、子どもの造形活動の関係と過程を、教師と協働で構想して実践し、経験年数の異なるグループ編成により子どもの造形活動の関係と過程を参与観察してビデオカメラに記録し、相互行為に着目したビデオカンファレンスの研修を実施した。この研修過程のビデオ記録の相互行為分析により、教師において学習活動や教育実践の自明な前提として働いている「子ども観」「学習観」「教育観」「教師観」をとらえ直し、省察可能とする研修過程を明らかにすることを目的とした。

## 2 研究の概要

第1章では、現在の教育の状況や問題点が、教育実践の場における「子どもの見えにくさ」にあることを、本田和子や浜田寿美男等の子ども学や現象学的発達心理学の知見をもとに示した。子どもの見えにくさとは、学習者として子どもが、教師の眼前で行っている行為や経験、志向性が、学習場面で教師に観察不能や理解不能、対応不能であることが頻出することである。

文部科学省指導資料『新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開』（1993）では、新しい教育の基本的な考え方として「これからの教育は、子供の側に立ち、子供たちが自ら考え、主体的に判断し、表現したり行動したりすることができる資質や能力の育成を重視する教育へと、教育の基調の転換を図る必要がある」ことを示している。子どもの学習活動の視点に立つ新しい教育の実践化の考え方として、「新しい学力観に立つ学力の育成」と「子どものよさや可能性を生かす教育」の二つの観点とその内容より、「生きる力」すなわち「資質や能力」としての学力観とその転換について示した。

第2章では、現在の「子ども」の見えにくさとともに、教育の実践場面において「大人」が「子ども」を未熟なもの、大人よりも劣った存在、発達すべき存在として下位に見る見方が一般化されている。「子ども」や「学校」、「教育」や「学習」に対するこうした見方とその自明化が、近代化において位置付けられてきた過程を、フィリップ・アリエス、ニール・ポストマン、中野光等の文献より示した。そして、子ども観の転換について、認知科学や現象学的発達心理学の知見より学習者自身の行為とその過程による知の社会的構成として示した。

第3章では、明治になってつくられた「美術」という言葉や制度とその時代背景について、北澤憲昭、佐藤道信、木下直之等の日本美術史の知見より示し、「造形遊び」の意義と可能性について明らかにした。また、文部科学省『小学校指導書図画工作編』（平成元年）や『新しい学力観に立つ授業展開のポイント図画工作科』等の指導解説書より、「新しい学力観」における図画工作の位置づけと可能性と、昭和52年学習指導要領より図画工作科の学習内容として独自に構想され改善されてきた「造形遊び」という学習活動の見方と在り方を、「資質・能力」としての学力観より再定義した。また、こうした学習活動の実現にかかわる教師の留意点について、筆者自身の実践論文と考察をもとに示した。

第4章では、「造形遊び」の学習活動のもつ特有の関係や過程に着目し、子どもが生きる力を育む学びの実践過程を明らかにするため、社会学のエスノメソドロジーにおける相互行為分析を用いて、図画工作科における子どもの造形表現行為と表現世界の記述分析を実施した。次のことがこれにより明らかになった。子どもたちはつくる行為を媒介にして、友だちと関わり合いながら様々な新しい意味をつくりだし、その過程で自分の見方、感じ方、考え方、表し方、ふるまい方をつくり出したり、つくり変えたりしている。子どもたちは、「造形遊び」の活動を通して、①ものや場への主体的で能動的で相互作用的なかわりを通した行為と意味の関係、②表現行為を協働して行う他者との間での、ものや場、材料等のよさや可能性への共感と協働の関係へ、③自分の見方、感じ方、考え方、表し方、ふるまい方の触発やつくり変わりへの関係へ、多元的に自身の実践を開いていく姿が示された。「造形遊び」を通して、個別の知識や技能のみではなく、他者とともに世界とかわらうとし、「自分が、広がる力」すなわち「生きる力」をよりよいものへと相互作用的に形成することを明らかにした。

第5章では、筆者の授業実践と事例の相互行為分析より、子どもが生きる力を育む学びの過程や、その過程をつくる教師の姿勢や在り方について明らかにした。子どもの造形表現行為の過程の実際が、教師の自明化した枠組みのため不可視化していること。子どもの行為に対して、理解不能な関係性を形成していることを示した。そして、子どもが行うつくり表す行為を、もの・こと・ひととの相互作用・相互行為の視点からビデオを見直したり、記述してとらえ直す試みを繰り返したりすることで、自明化した枠組みが解消し、子どもの学びの過程に対応した支援や、題材の在り方という視点と方法が形成され、教育実践への省察が深化し、実践力が高まることを明らかにした。

第6章では、子どもが生きる力を育む学びの過程をみて語り合う実践を通して教師が変容する研修の在り方を、M市立K小学校やN市立S小学校における授業実践と事後協議会、新潟県立近代美術館における対話型鑑賞後のインタビューにより明らかにした。

研修指導者である筆者と授業者とが協働して造形遊びの学習活動を構想し実践した。初任、中堅、熟達の経験年数の異なる教師グループで特定の子どものに着目し、材料や作品等のものや、友達や教師等の人と相互作用的にかかわりながら、作品や場所の意味をつくり、つくり変えていく過程を、ビデオ記録する参与観察を実施した。撮影したビデオを用いたカンファレンスによる事後協議会を実施し、「造形遊び」における子どもの行為の関係と過程から、学びの過程の見方やとらえ方を、ビデオを媒介にした参観教師の個々の語りを媒介にして共有し、「学習」「子ども」「教師」「教育」等について自明化していた自身の見方、感じ方、考え方、ふるまい方を、その場で省察し転換していく過程が示された。子どもが生きる力を育む学びの過程をつくる教師として、子どもの学びを常にとらえ直し実践する専門的で高度な眼差しの形成を可能とする教育研修のあり方を、子どもの造形活動の関係と過程へ、相互作用的に関わる教師の実践を通して明らかにした。

本研究全体を通じて、図画工作科における教育実践研究は、多様な育ちにある子どもにとって、資質や能力としての「生きる力」を、他者やものや場と相互作用的に育むことが可能となる実践の関係性が含まれた造形活動の研究であること。「造形遊び」は、こうした「生きる力」を育む学びを可能とする造形活動の過程であり、実践関係の具体性に着目した学習活動であること。そして、子どもの「造形遊び」の実践過程に着目し、その過程を実践研究のフィールドとして、経験年数の異なる同僚と共に、これにより添い、語り合うことで、子どもの学びを捉えなおす教育研修は、教師の省察と協働を相互作用的に形成する実践的な教育研究のあり方であることを示した。